# 〝儒教文化〟に新しい光

## ＝『東アジア比較研究』スタート＝

中嶋嶺雄

### 世界経済の重心 東アジアに移行

失業、エイズ、犯罪の増大に象徴される欧米先進諸国の社会的・経済的逼塞（ひっそく）。アメリカ合衆国の世界最大の債務国への転落。その間隙（かんげき）を縫って国際的に広がる狂乱的な投機。こうしたなかで昨今は世界恐慌の再来さえ語られ始めている。だが、世界大恐慌といった事態にはならないのではないか。その理由の一つは、いまや世界経済の重心が、明らかに東アジアに移行しているからである。やがて二十一世紀初頭には、日本、台湾、韓国の三カ国だけでも人口約二億、世界のGNPの約二〇％を占めることになるだろう。これは、今日のアメリカ合衆国が世界に占めている地位にほぼ相当する。これら東アジア諸国が活力を維持しているかぎり、世界恐慌の再来も防げるのではなかろうか。

ところで、東アジアがいわゆるシナ文明圏、漢字文化圏であるとするならば、そこには大陸中国はもとより、日本、韓国、北朝鮮、台湾、香港、シンガポール、ベトナムなどの諸国が存在し、東南アジアの華僑社会も含まれよう。この東アジアを「儒教文化圏」という枠組みでとらえ、これら地域の近代化・工業化のカギを探ることができるかどうかという新しい問題提起がいま内外で起こりつつある。

### 儒教文化圏研究の試みが内外で

最近ではフランスのレオン・ヴァンデルメールシュ教授（パリ第五大学）の新著『新しいシナ的世界』（邦訳『アジア文化圏の時代』、大修館書店）や韓国の金日坤教授（釜山大学）の『儒教文化圏の秩序と経済』（名古屋大学出版会）、さらにはWm・T・ドバリー教授（米コロンビア大学）の『朱子学と自由の伝統』（平凡社）など、儒教的な倫理や規範に新しい光を当てて、学習志向、家族集団主義、官僚制度、現世的な合理主義など近代化、工業化、そして経済運営に適した伝統や精神を儒教文化のなかに探ろうとする試みが学問的にもきわめて高いレベルでおこなわれはじめている。

このような知的文脈のなかで、私たちにもっとも身近な東アジアの現実を直視しつつ学際的な共同研究に着手すべきであるというコンセンサスが、ここ二、三年、わが国の学界にも生まれつつあった。

たまたま本年度から大型プロジェクトとしての文部省科学研究費重点領域研究が発足したのであるが、その重点領域研究として人文・社会科学分野で唯一つ採択されたのが「東アジアの経済的・社会的発展と近代化に関する比較研究」（略称「東アジア比較研究」）である。

### 枠組みの是非めぐり議論が沸騰

この共同研究は、中核となる「計画研究」グループに「公募研究」グループを加え、数十名の第一線研究者が全国各地から大学・研究機関の壁を越えて参加している。

その第一回全体会議が去る七月十日から十二日まで大磯で開かれ、きわめて活発な議論がたたかわされた。今回は三年間にわたる共同研究の出発に際しての集まりであるだけに、研究参加者が相互に刺激しあい、問題の所在を探ることに主眼がおかれた。まず共同研究全体の代表者として私が「東アジア比較研究の課題と展望――いまなぜ〈儒教文化圏か〉」と題する基調報告をおこなった。私の問題提起に対しては、〈儒教文化圏〉という枠組みの是非をめぐっても賛否両論、議論が沸騰したこと自体、大きな収穫であった。

次いで猪口孝（東大）「現代中国体制論――レーニン主義体制・一党優位体制・儒教的権威主義体制」といういささか挑発的な報告、渡辺利夫（筑波大）「韓国の成功をもたらしたもの」と題する緻密（ちみつ）なレポート、岡部達味（都立大）「アジア近代化の比較」という広範囲の問題点の提起を中心に多くの参加者の鋭い議論が交わされた。ゲスト・スピーカーのジュリアン・フェアフィールド氏（国際ビジネスコンサルタント）と討論者のパリス・チャン教授（ペンシルベニア州立大）のあいだのキリスト教社会と儒教社会の企業経営をめぐる論争も興味深かった。

### わが国でも初の〝共同地域研究〟

こうして「東アジア比較研究」はスタートしたが、このような共同研究の目的は、一つのコンセプトや結論を早急に見いだそうとすることではなく、様々なレベルで問題群を発見し、それらの連関を検証し掘り下げることによって、学問的な活性化を図ることにあるといえよう。同時に、それぞれの研究者が個々の課題を追究しながらも、自らの古い殻を破って新しい分野に触手を伸ばし、全体としてより実り豊かな果実を獲得することにあるといえよう。「東アジア比較研究」という、おそらくわが国でも初めての学際的・多専門的な共同地域研究は、こうしてその第一歩を刻んだのである。

（東京外語大教授＝国際関係論）